

ヒッタイト文書における儀礼の失敗 に対する態度とその聖書との関係*

Attitude towards Ritual Failure in Hittite Texts
and Its Reflection in Biblical Texts

アダ タガー・コヘン
Ada Taggar-Cohen

キーワード

išhiul-、儀礼の失敗、ヒッタイトの宗教、ヘブライ語聖書における宗教、儀式文書のジャンル

KEY WORDS

išhiul-, Ritual failure, Hittite cult, Hebrew Bible cult, genre of ritual texts

要旨

ハットゥシャ (Hattuša) の王室文書庫から見つかったヒッタイト文書の大部分は儀礼文書である。このことは、数世紀にも渡ってハットゥシャの図書館や文書庫に文書を集積・保管していたヒッタイトの人々にとって儀礼がいかに重要であったかを物語っている。すべての儀礼文書は儀礼の規範を示すという特徴があり、詳細な行為の手順を指示している。本稿で提示されるヒッタイト文書は、いかなる場合に儀礼が失敗と見なされるのかを理解するための背景を示している。また、それらの文書は、祭儀を行う人々が儀礼行為に神々が満足しているかどうかをいかに体系的に確認していたのかを明らかにするものでもある。さらに、失敗が起きた場合にどのように埋め合わせをしたのかも示している。このような手続きは、王家による宗教行為を執り行うという行政上の枠組みを整理・維持する王室行政の一部であった。祭儀の法は神々から直接与えられるものとされた一方、王にはそれを実行に移す責任があった。それゆえ、神々に権威づけられた祭儀の法は常に王によって発行されるものであった。ヘブ

ライ語聖書においても神聖な祭儀の法は YHWH に与えられるものと理解されたことが示されているが、それを権威ある法として定めたのは王ではなく祭司であった。

SUMMARY

The majority of Hittite texts recovered from the royal archives of Ḫattuša are ritual texts. This shows the high importance that rituals held for those who collected and preserved these texts for centuries in Ḫattuša's libraries and archives. All of these ritual texts have a prescriptive character, and they specifically prescribe the cult's ritual performances in detail. The Hittite texts presented in this paper provide a background for understanding when rituals can be regarded as failure. These texts also reveal how the cult's authorities systematically checked whether the divine world was satisfied with the ritual activities. In addition, they described countermeasures in the case of failure. This confirmation procedure was a duty of the royal administration, which ordered and maintained the bureaucratic framework in which the cult's royal rituals were performed. Accordingly, authoritative cultic law was always royal. Biblical texts show a similar understanding in regard to divine cultic law, but authority here is divided between royalty and the priesthood.

*本稿を翻訳していただいたシラ・マルカ・コヘン氏と山本孟氏（PhD）に感謝の意を表する。

**本稿の一部は2017年8月に開催された the International Meeting of the SBL および EABS で発表した。

***本稿で引用したヒッタイトのテキストは Emmanuel Laroche, *Catalogue des Textes Hittites* (Paris: Éditions Klincksieck, 1971) (以下、CTH) の番号に基づいている。CTH では、文書のジャンル別に番号が付されており、各文書は楔形文字の手書きコピー (KBo シリーズ) で出版されている一つないし複数の粘土板がまとめたものとなっている。本稿でヒッタイト文書を引用する場合は、粘土板の表面 (obv.) と裏面 (rev.)、およびコラム (i, ii, iii)、行数に基づいている。なお、Laroche によって番号を付された文書はすべて Hethitologie Portal Mainz のウェブサイトの Konkordanz の項目で確認できる (<http://www.hethport.uni-wuerzburg.de/HPM/index-en.html>)。

1. 序論

儀式にかんする広範な研究において、近年「儀礼の失敗」というテーマが注目されており、複数の方法論的研究が試みられている。中でも1998年に Ronald Grimes が発表した論文が最も重要であり、また頻繁に引用されている¹。その中でグライムスは言語行為論を用いて儀礼の失敗を論じ、次のように儀礼が不適切になり得る9つの行為を挙げている。

1. 不発（行われたものの無効な行為）、2. 乱用（言葉にしたものの中身のない行為）、3. 無効（期待された変化をもたらさない行為）、4. 違反（効果があるものの恥ずべき行為）、5. 伝染（適切とみなされる境界を超えた行為）、6. 不明瞭（認識もしくは理解出来ない行為）、7. 破棄（他者の行為を無効にする行為）、8. 省略（行われなかった行為）、9. 誤った枠組み（誤解された行為）（Grimes 1988, p. 116）

以上のように定義される儀礼の失敗は、ヒッタイト文書にも確認されるため、それらは儀礼の失敗についての普遍性を表しているかもしれない。一方でヒッタイトの儀礼と儀礼の失敗に対する態度は、絶対的権威であった神々の世界と人間の世界との関係から観察できる。神々と人間の間を「君主と臣下」として理解するヒッタイトの考え方は、次のように述べられる（CTH 264 §2: 21-33）。

「人間と神々の魂に違いがあろうか。そうではない！[こ] れは実に（そうではない）！そうではなく、魂は全く同一である。奴隷がその主人の前にいるとき、彼は体を洗い、清潔な衣服を身につけている。彼は主人に食べ物や飲み物を渡す、あるいは飲み物を渡す。そして、主人が飲み食いしている間、奴隷の魂は和んでおり、そのため主人は奴隷と結びついている。しかし、奴隷が怠慢である（？）とき、（たとえ）そのようなときでも、主人は（彼のことを）不満に思わない。神々の魂はこれとは違うだろうか。もし、奴隷が彼の主人を怒らせようものならば、彼は殺され、もしくは彼の鼻、目（そして）耳が傷つけられる。または、主人が彼と彼の妻、子供、兄弟、姉妹、義理の親戚、家族、彼の男奴隷・女奴隷を[捕ら] える[だろう]。彼らは彼を呼び寄せるだけで、彼に何もし[ない]（かもしれない）。しかし、彼が死ぬときは、一人では死なず、彼の家族も彼と道連れになろう。」²

このように、ヒッタイトの祭儀の専門家らは神々に奉仕する際に細心の注意を払うよう戒められていた。次に挙げる『ハットゥシリ1世の遺言』と呼ばれる文書は、現存する文書は紀元前13世紀の書体で書かれているが、原典はそれより古くヒッタイト王国の初期に成立したものである。その中で、ハットゥシリ1世は後継者のムルシリ1世に対し、祭儀の専門家への戒めに似た警告をしている（CTH 6 § 21-22）³。

「[神々]のことに對しては大変慎重であれ。彼らの聖なるパン、彼らの捧酒、彼らのシチュー、そして彼らの食べ物は彼らのために常に用意してなくてはならない。あなた（ムルシリ）は（それらを）後回しにしてはならず、（届けるのを）遅らせてはならない。もし、あなたが〔（それらを）後回しにする〕ならば、これまで（そうであった）ように、それは悪である。[そのようで] あれ！」

このようなハットゥシリ1世の言葉は命令として同文書中に繰り返される（CTH 6 § 22）。

「私はあなたに私の**言葉**を与えた。彼らは**毎月**この（書板）をあなたの前で読み上げよ。そうすれば、あなたは私の〔言葉〕と私の知恵を**あなたの心**に刻み込み、私の〔臣民〕と貴族らを上手く**治める**ことができるだろう。」

Beckman が『ハットゥシリ1世の遺言』を王令と呼んだことに示唆されるように、この文書は、行政文書としての性格を有しており、のちの時代に作られるようになった *išhiul* と呼ばれる訓戒文書のカテゴリーに属するものである。『ハットゥシリ1世の遺言』の場合では、貴族と後継者ムルシリ1世に対する訓戒—訓戒そのものはヒッタイト語では *udder*-「言葉」と呼ばれる—ということになる⁴。では、儀礼にかんする訓戒文書には、どのように儀礼の失敗に対処するよう定められていたのだろうか。

2. ヒッタイトにおける儀礼活動の考え方

まずは聖書のヨナ書の引用から始めたい。預言者ヨナは、ニネヴェに災いが降ると預言したにも関わらず、実際に起こらなかったため、自らの預言が偽証されるのを恐れていた。

מִי־יִוָּדַע יָשׁוּב וְנָתַם הָאֱלֹהִים וְשָׁב מִתְרוֹן אִפּוֹ וְלֹא נֶאֱבַד:
וַיֵּרָא הָאֱלֹהִים אֶת־מַעֲשֵׂיהֶם כִּי־שָׁבוּ מִדֶּרֶכָם הֲרָעָה וַיִּגְזֹם הָאֱלֹהִים עַל־הָרָעָה אֲשֶׁר־דָּבַר לַעֲשׂוֹת־לָהֶם וְלֹא עָשָׂה:

「『…』 そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我我は滅びを免れるかもしれない。神は彼ら業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。」(ヨナ書3章9-10節、新共同訳聖書)

ヨナのエピソードはヒッタイトにおける神の理解にも通じる。人間が悪行を働き、罪を犯していかに神々を怒らせたとしても、さまざまな方法を駆使して神に償いをすれば、怒りを鎮めることができると考えられていたのである。ヒッタイトでは、神々の怒りの原因は、多くの場合、地上の人間による奉仕に不行き届きがあったからだ信じられていた。それゆえ、神の怒りの理由を知るためには、神々とのコミュニケーションが必要となった。そのようなコミュニケーションの多くは祭儀を通じて行われた。祭や特別な儀礼によって神々を奉り、占い師や鳥占い師など、占いを職業とする者が神々の怒りの原因を探った⁵。後述のように、たいていの神々の怒りは、祭が適切に執行されなかった場合や捧げ物が不十分であった場合、正式な手順から逸脱した場合、あるいは神の名の下に立てられた誓いが破られた場合に生じるものであった。

上記のヨナ書の引用と関連しているのは、ヒッタイトの人々の神々の世界への関わり方と、神々の怒りが人間の悪行から生じるものであると理解されていた点である。本稿では、ヒッタイトの人々が儀礼に対してどのような態度を取り、彼らにとっては何が「儀礼の失敗」であったのかを示すことを目的としている。本稿では、儀礼にかんする二種類の文書から、そこに映し出されるヒッタイトの儀礼に対する態度を明らかにする。一つは、数世紀に渡ってヒッタイト王国の書記たちが継承し続けた数百に及ぶ儀礼の指示書である。これらに基づいてヒッタイト語で *išhiul-* と呼ばれる訓戒文書が法的な手引きとして作成された。もう一つは占い文書である。占い文書は、ヒッタイトの人々がさまざまな方法で神々の怒りの原因を探求して明らかにできると信じていたことを伝えてくれる。加えて、筆者は儀礼研究の枠組みからも「儀礼の失敗」についても論じたいと考える。

2007年に出版された論文集 *When Rituals go Wrong: Mistakes, Failure and the Dynamics of Ritual* において編者の Ute Hüsken は、何が儀礼の失敗とみなされるのかという問いかけを通じて、さまざまな角度から儀礼の失敗についての研究を概観している⁶。儀礼の失敗が起こる可能性は二種類ある。すなわち、儀礼の結果が予想されたものと違っていった場合か、もしくは不正な行為がなされたり、不適当な人が儀式を執り行ったりするなど、儀礼中に間違いがあった場合である。筆者は、ヒッタイトにおける儀礼の失敗に対する態度を理解する上では、Hüsken が論じたさまざまな側面のうち、次の二つの側面が特に重要であると考え。1) 一つは研究者が儀礼を理解

するための文書の問題である。2) もう一つは Hüsken が「逸脱の創造力 (“creative power of deviations”)」と定義するものである⁷。

詳細を掘り下げていく前に、本稿で議論するヒッタイトの儀式について付言しておきたい。ヒッタイトの儀礼は文書に記されている。ヒッタイトの文書庫で見つかった文書の約8割が宗教に関するものであったため、ヒッタイトの儀礼を研究する際には大量の文書が立ち現れてくる⁸。文書庫は王室のものであったため、文書には王家の者が参加する儀礼や、特定の王家の人々のために行われた儀礼に言及がある。儀礼は一日から数日に渡って複数の祭を伴う式典であったが、一日にも満たないような短い儀礼もあった。また、一人で行うものから数人が参加する儀礼、さらには人々に公開される儀礼もあった。儀礼の失敗について言えば、「儀式内」の失敗も「儀式全体」としての失敗もあった。いずれの場合でも、失敗があった場合にヒッタイトの人々にとって重要であったのは、間違い、つまり「罪」(ヒッタイト語で *waštul-*) を見つけ、それを正すということであった。

3. 祭儀の実行にかんするヒッタイト文書の種類

次に、文献的根拠となっているヒッタイト文書のジャンルを整理する。

A. 第一のジャンルは、儀礼を執り行う専門家に儀礼の方法を指示する、規範を記した文書である。その中では、すべての行為が手順を追って詳細に指示され、間違いが起こらないようにされている。以下に一例を挙げる。

1) 祭全体に対する訓戒 (CTH 456 ii 24'-iii 1-8)

「和解の祭の日が来た時、もし街の中に嵐の神の息子の像または嵐の神の息子の神殿があるならば、サンガ (SANGA) 祭司とアマ・ディンギル (AMA.DINGIR) 女祭司らは、あらかじめ体を洗い、頭から飾り輪を取り、代わりに鉢巻を頭に巻かなければならない。彼らは白い布も身にまとう。彼らは神殿を掃除する。彼らは床を磨き、神殿の中と外に (水を) 撒き、屋根が漏れないようにしなければならない。」⁹

次の文章 (KUB 25.36 v 1-8) では祭の中で行われる特定の儀礼に細かい指示を出している。

「グドゥ (GUDU₁₂) 祭司は「嵐の神の男」に *tapišana* の器を [渡す]。「嵐の神

の男」が持ったものを、グドゥ祭司が受け取る。グドゥ祭司は *tapišana* の器を王の前に掲げ、王は離れたところから（その上に）三度手を置く。そして、グドゥ祭司はザババ（ZABABA）神への三度の献酒を行う。そして、捧酒の器を持った「嵐の神の男」は三度（*tapišana* の器を）満たす。]¹⁰

このように、指示を通してそれぞれの祭や礼拝に必要な儀礼行為を記述する多くのヒッタイト文書がある。

- 2) 王家の者が個人で行う儀礼については、以下に示すような王妃が女神への礼拝する方法を指示する文書がある（CTH 714 § 4' i 19-29）¹¹。

「王妃が女神の前に来た時、彼女はお辞儀をする。その後、占い師が女神を取り、王妃は彼らが七つの水差しに持っている水で女神を洗う。彼らは彼女（すなわち女神）の下に桶を持って、桶の中で女神を洗う。女神を洗い終えた後、王妃は彼女に「上質な」油を注ぎ籐細工の机の上に置く。」

この粘土板の奥付には「一枚の書板。王妃がニネヴェのイシュタルへの毎月の祭に巡幸するとき。完了。」と書かれている。

このように詳細な儀礼に対する規則の多くは、儀礼の失敗の原因となりうるあらゆる間違いが起らないようにするためであったと思われる。

B. 第二のジャンルは祭儀の専門家に対する訓戒文書である。これは、ヒッタイトの人々が人間の弱さを認識していたことを示している。その弱さゆえに、専門家に訓戒を与える文書が必要であったのである。先述のようにヒッタイト語で *išhiul-* と呼ばれる訓戒文書は、王室の僕としての務めを果たすことを義務づける法的な文書であり、祭儀の専門家に対して怠慢や不正な行為を個別具体的に戒めている。これらの規則は起こりえる失敗を踏まえて作成されている。たとえば、そのような規則は以下の例（CTH 264 § 12: 35-43）に見られる。

「さらに、あなたたち、[すなわち] サンガ（SANGA）祭司とグドゥ（GUDU）祭司、アマ・ディンギル（AMA.DINGIR）、「神殿の男」は、[もし?] 神殿内に *tuhmeiant-*（の人?）が[いた]り、他の聖所で誰かが酒に酔っていたりするならば、あるいはもし、彼が神殿内を乱して口論し、祭を中断するならば、彼らに彼を打たせなさい。[さら]に、彼に牛と羊、パン、ビールをもってあらかじめ

決められたようにその祭を執り行わせよ。彼は薄いパンをも欠かしてはならない。これを怠る者は誰であれ、あらかじめ定められた祭が執り行われなければ、その（者）には重大な罪が課せられるであろう。その者に祭を再調整させよ。口論には十分に注意せよ。』¹²

このような失敗は死刑に処せられることもあり得る「罪」であったと考えられる（CTH 264 § 14: 55-63）。

「さらに、あなたたち、献酌官と給仕、料理人、パンを焼く者、ビールを醸造する者、すなわちすべての神々の台所付きの者は、自らのために神の意思を非常に恐れなければならない。神々の厚いパンと捧酒の器（に）十分な敬意を持ち続けよ。あなたたちの台所は常に清掃され、（水が）撒かれているように。豚（や）犬に入り口を越えさせてはならない。そしてあなたたちは洗われていなければならない！清潔な服を着て、そしてまたあなたたちの髪と爪を取って、神々の魂があなたたちを不快に思うことのないようせよ。」

CTH 264 § 3:34, 38:「もし、[誰] かが神の魂を怒らせるならば、[……] すべての物と（ともに）、神は彼を破壊するだろう。」

CTH 264 § 2:33:「しかし、彼が死ぬときは、一人では死なず、彼の家族も彼と道連れになろう。」

これらが失敗とみなされる不正行為に対する警告である。これらの失敗は、神々の怒りの原因となって儀礼の責任者個人だけではなく、支配者と国全体に災いをもたらすものであった。このことについては、神々に対する王の祈りに確認される。その中で王は、自分自身の罪だけでなく、かつての王たち、臣下らが犯したいかなる罪の責任をも負うものとされている。したがって、王の病であれ、戦争での敗北や国に蔓延した疫病であれ、王に下るすべての災いは、王自身やかつての王たち、王の臣下である祭司たちによる過失によって引き起こされた神々の怒りであると考えられていたのである。ここに一例を挙げると、ムルシリ2世の治世、ヒッタイト国に深刻な疫病が蔓延していた。王は彼の個人神とすべての国家の神々に祈りを捧げ、助けを求め、疫病を鎮めようとした。ヒッタイトの文書庫で見つかった多くのムルシリ2世による祈りの一つには、以下のように書かれている。

しかしのちに、あなた方、神々よ、[私の主人たち] は舞い戻り、今この小トゥドゥハリヤの件で私の父に報復した。私の父はトゥドゥハリヤの血ゆえに「死ん

だ]。そして、[私の父に] 味方した王子たちや貴族、千人隊の長、将校らも [この] 件のために死んだ。この件はまた、ハッティ国（全土）を冒し、[ハッティはこの] 件のために崩壊し始めた。そしてハッティは [荒れ (?)] 果てた。今、疫病はさらに [悪化してきた]。ハッティは疫病に [ひどく] 苦しめられ、衰弱している。私、ムルシリ、あなたの僕は、[私の心の] 動揺を [抑えること] ができない。私は、私の体の苦痛を [抑えること] ができない¹³。

C. 第三のジャンルは神々の怒りの原因を探し求めるための占い文書である。神々の怒りは常に占いによる問いかけによって確かめられた。占いの中ではどの神が怒っているのかを特定するところから始められる (CTH 574, IBoT 2.129)¹⁴。

「神 [殿] の中で [怒っ] ていると判断された強大なる嵐の神については「神殿の男」たちに尋問したところ、彼らはこう言った：『この神のために行われた7年目のプルリヤ (*purulliya*) の儀礼 (あるいは供物) が省かれた。』」

この文章は、求められるように儀礼が執り行われなかったことに加え、儀礼において禁じられる行為を次のように列挙している。1) 金や銀、貴石を剥ぎ取って祭具を損ねること、2) 王の軍隊が神殿を離れることで神殿を無防備な状態にすること、3) 神へのぶどう酒や塩、服の供給を中断すること、4) 王が神殿を参詣あるいは神々を崇拝することを怠ることである。

鳥を用いた占い (鳥占い) では、どのようにして失敗を償うべきかが問われることがあった。

- 1) (KUB 5.7 33')¹⁵ 「彼らが日々のパンを供えるのを怠ったことについては、30個のパンを彼らは与える。フリ鳥 (の占いは) 好意的である。」
- 2) (34'–35') 「犬がテーブルに近づき、日々のパンを食べたことについては、彼らはそのテーブルを壊す。日々のパンを彼らは二倍償う。罰として、一頭の羊、パン、(そして) ビールを彼らは与える。彼らは彼らを打つ。フリ鳥 (の占いは) 好意的である。」
- 3) (36'–37') 「体が欠けている人 (や) 傷を負った人が神殿に入ってきたことについては、ヒッタイトの「老女」が、いつも彼女が [神のために] 行っているのと同じように (儀礼) を行う。フリ鳥 (の占いは) 好意的である。」

このようにヒッタイトには、一方では儀礼をどのように行うべきかという規則と、他

方で儀礼行為の失敗にいかに対処するべきかという規則を確認するための体系的な手段があった。儀礼を詳細に規定する文書（一つ目のジャンルの文書）と、法的な訓戒文書（二つ目のジャンルの文書）を作成することは、いずれも王の大権であり、王の神々に対する責務であると見なされていた。

ここで、Ute Hüsken の行った儀礼の失敗に対する評価に戻りたい。彼女は、「誰が儀礼を行う能力がある適任者であったのか」という問いかけと、「誰が誤りを暴き、正す権利と能力を持っていたのか」という二つの問いかけをしている¹⁶。上に引用してきた文書から分かる通り、ヒッタイトの場合、儀礼の失敗を特定してそれを正す方法を見極めることは祭儀の専門家の責任であった。ただし、儀礼が正当であることの根拠は、神々から権限を委託されたヒッタイト王が神々の世界の意思に基づいて儀礼の方法を決定したということであった。

筆者はこれまで「神聖な法としてのヒッタイトの儀礼」について考察してきた。その中で、ヒッタイトにおける祭や儀礼の文書とは神々の世界が下した祭儀の法を書きとらせたものであり、それを遂行・維持する責任を負う王は、神殿など信仰の中心となる場所やそこで働く人々に法的な王令を発布していたのだという点を示した。そのような王令は、「このように言う」と訳されるアッカド語の *UM-MA*、あるいは「～の言葉」と訳されるアッカド語の表語文字 *AWAT* を伴う句を使って文書として提示された。これらの成句は神殿で働く人々に祭儀を指示する王の法的権威を示すものであった。ただし、次のムワタリ (Muwatalli) 2世の言葉によれば、王が儀礼を行う者に委託した祭儀行為には典拠があった (CTH 382 obv. 12-28)。

「私、陛下は今、文書記録（字義通りには、木製書板）に見つけるものはすべて実行する。[しかし、私が満たし得なかった[神々へのすべての] 儀礼、嵐の神よ、あなたは[それを] 知っている。私は尊敬に足る『老人 (*šal-li-in* ^{LÚ}ŠU.GI)』の意見を聞き、彼らが[それぞれの?] 儀礼を思い出して報告するように、そのように実行するだろう]。[そして] 私が国土に再び入植し、それが見つかる(?) までの間、私が再び見出した神々の法 (*ŠA DINGIR*^{MEŠ}-*ma iš-ḫi-ú-ul*) を確実に執り行ない、今後それが実行されるように。」¹⁷

儀礼をどのように行うべきかという知識を得るには次の三つの段階がある。1) 時代を通じて書き写された粘土板や木板に記された記録を通じて得る場合、2) 共同体や神殿の年長者らの口頭伝承を通じて得る場合、3) 神との直接の接触を通じて得る場合（この場合は夢の中で示される）である。要するに、神の祭儀とは神自ら法として王に委任したものであり、王はその神の意思に従って祭儀を執行しなければなかった

ということである。ここでムルシリ2世の語ったある有名な事件を取り上げたい。ムルシリ2世は、シャムハ (Šamuḫa) の町の「夜の女神」に対する儀礼について神殿で働く人々の行為を正したという (KUB 32.133)。

「陛下、ムルシリ、偉大なる王、シュッピルリウマ (Šuppiluliuma) の息子、大王、英雄はこう言われた。『私の父 (祖) である大王トゥドゥハリヤ (Tudḫaliya) がキズワトナ (Kizzuwatna) の「夜の神」の神殿から「夜の神」を移し、シャムハの町の神殿でその神を崇拝したとき、彼が「夜の神」の神殿のために書き取らせた祭儀の規則／法を、木製書板の書記と「神殿の男」たちがやって来てそれを変えてしまった。』」¹⁸

この訓戒文書において、ムルシリ2世はかつての王が求めた通りの祭儀の法を復活させたのであった。

このように、常に神の承認を必要とするものの、儀礼行為を決定するのは王の権限であったことが分かる。他方でさまざまな失敗を起こしたとき、祭儀の専門家たちにも儀礼行為の手順を変える手段があった。つまり、祭儀の手順を記した文書を書き換えたのであった。ただし、宗教が国家運営上の行政の一部であったことを踏まえると、宗教に革新的な変化をもたらし得たのは王令であったという点に、より注目すべきである。ヒッタイトの歴史上、何人かの王の下で宗教改革が行われたことが知られている。なかでも史料が豊富なのは、ムルシリ2世がアリンナ (Arinna) の太陽女神とハッティの神々を讃えるために行われる春の大祭アン・トゥフ・シュム (AN.TAḪ.ŠUM) 祭を変更したことである。ムルシリ2世は、この祭に自らの個人神を崇拝する二日間 (ピハッシャッシ (Piḫaššašši) 神を祝う第18日と第19日) を追加したのだ。近年、この祭の詳細を記した粘土板がさまざまな時代に確認されたことから、祭が時代を通じて何度も改変されたことが証明された¹⁹。祭が改変された一方、その改変は神の同意を得ることによってのみ権威づけられた。このような事例は次の神託に認められる (CTH 586)。

「ハダウリ (ḫadauri) 祭が書板とは変更されているため (占いが行われた)。書板では10頭の羊が供えられている…しかし、(そのことで) 食べることにコップの処理については何も書かれていない。(そこで)、このうちの9頭の羊は嵐の神に、10頭目はシェリ (Šerri) とフリ (Ḫurri) に供えよう…1頭の羊の肉は残し、あとの9頭は宮殿に届けられる。『神よ、このことをお認めになりますか。』((占いの結果は) 然り)。『神よ、あなたは他の神殿でのすべてのハダウリ祭が、嵐の

神の神殿で執り行われているのと同じように実行されることをお認めになりますか。』((占いの結果は)否)。²⁰

占いの答えが否定的であったため、各神殿について問いかけがなされた。最終的には、一連の占いを通じて儀礼行為に対して神が何を承認し、何を承認しないかが確認され、その意思に背く行為はいかなることでも罰すべき罪であるとされた。神殿で働く人々への訓戒文書に明確に示されるように、その罰とは神自身によって与えられるものであった (CTH 264 § 7:26-29)。

「以後、神々が動けば、その意思は強い。捕らえるのは速くないが、一度捕らえられると二度と逃げられない。神の魂を十分に恐れよ。」

4. ヒッタイトの儀礼の失敗に対する態度の概要

ヒッタイトでは、神々から行為の詳細について承認を得るための占いにに基づき、文書を通じて祭儀の専門家たちに神への祭儀を行う手順を指示することが試みられた。その点で祭儀の法は神の法である。祭儀に対する訓戒は、たとえアナトリア内外のヒッタイトの人々のものとは異なる伝統に基づいた文書として王室の文書庫に納められたものであったとしても、常に王によって発行されていた。それらは王の命令として、あるいは時に王妃の命令として王家によって発行されていたのである²¹。

Ute Hüsken は、その儀礼研究の中で Ambos によるメソポタミアの祭についての研究を挙げて次のように指摘している。

多くの場合、仮定される儀礼の効力は、ある現象を儀礼行為の結果として公表することで「証明」された。たいていの場合、これは否定的な結果として起こった。つまり、災害や不運、病、急死などがそれまでに失敗した儀礼のせいだとすることに、教義上、効力に欠けるということが仮定されるのである²²。

儀礼研究は儀礼を統制する者の地位がいかに重要であるかを指摘している。誰が儀礼の統制権をもつのか？それは影響力のある Grimes の研究に示唆されている²³。

結果として、儀礼をめぐる争いはしばしば暴力や反儀礼化によって解決されるのであり、話し合いや討論、投票などで解決されるのではない。

5. ヒッタイトにおける儀礼の失敗に対する理解とヘブライ語聖書の相関と対比

神が自らの祭儀の法を書取らせるというヒッタイトの考え方と同じように、ヘブライ語聖書は YHWH の意思に言明している。YHWH の意思是、常に YHWH の「言葉」として示されており、権威を授かった機関—モーセ五書ではモーセ、のちに指導者、最終的には王—を通して明確に伝えられた。その点では、ヘブライ語聖書において祭司はモーセと同等に扱われており、申命記17章14–20節などでは祭司たちが権威者であることもある。列王記や歴代誌などの歴史的文書では、確かに王が祭儀に指示を出す権限をもつこともあれば²⁴、祭儀を行う者が暴力でその権限を奪うこともある²⁵。

ヘブライ語聖書において神が宗教を規定するという考えを明確に示す事例が、アロンの息子たちが「規定に反した炭火 (אֵשׁ זָרָה)」(レビ記10章1節)を使用した事件とその結末である。聖書では、彼らが「主の命じられたものではない (אֲשֶׁר לֹא צִוּוּהוּ אוֹתָם)」炭火を使用したとはっきりと示されている。そして、「すると、主の御前から火が出て二人を焼き、彼らは主の御前で死んだ」(レビ記10章2節)とあるように、彼らはその場ですぐに神によって罰せられている。この章の続きでは祭司たちによるその他の失敗が挙げられ、モーセがそれらに対して怒ったことが記されている。

この章の最後には、興味深いアロンによる演説がある(レビ記10章19–20節)。「アロンはモーセに答えた。『確かにあの者たちは今日、贖罪の献げ物と焼き尽くす献げ物を主の御前にささげました。しかし、わたしにこのようなことが起きてしまいました。わたしが今日、贖罪の献げ物を食べたとしたら、果たして主に喜ばれたでしょうか。』モーセはこれを聞いて納得した。」この文脈においては、モーセによる承認が神の意思を反映するものとして権威づけとなっている。また、先行するレビ記10章12–15節のモーセの言葉「これは主に燃やしてささげたものの残りで、あなたとあなたの子らに与えられた分 (חֶקֶךָ בְּנִיךָ, חֶקֶךָ)」である。わたしはそう命じられている。」(13節)にも、そのような権威づけが確認できる。モーセはアロンにどのように行動すべきかを命じて秩序を回復するのである。宗教行為の失敗は神自身の力で(祭司の死をもって)解決されるという考え方は、ヒッタイトの訓戒文書中の祭儀を行う者たちへの戒めに示される。

CTH 264 § 3:34, 38:「もし、[何] 者かが神の魂を怒らせるならば [……] すべてのものと(ともに) 神は彼を破壊するだろう。」

CTH 264 § 7:26-29:「以後、神々が動けば、その意思は強い。捕らえるのは速くないが、一度捕らえられると二度と逃げられない。神の魂を十分に恐れよ。」

6. 結論

ヒッタイトの儀礼とは、行為を規定する文書、あるいは誰がどのように神々を崇拜するのが正しいのかという規則を委任する文書である。本稿では、Hüske が提示した二つの論点つまり儀礼を権威づける根拠としての原典と逸脱の創造力—にしたがって、儀礼の失敗に対するヒッタイトの態度を説明した。

ヒッタイトの儀礼は、神々の要求を満たし満足させるための神々への奉仕を目的としていた。満たされない神は怒れる魂として人々に悲惨な結果をもたらした。それゆえ、ヒッタイトの人々は、神（々）はさまざまな占いの手段を通じて常に満足しているかどうかを問われるべきだと考えていた。儀礼の失敗は、信仰において行為が中断されたり、儀礼の法が履行されなかったりすることを意味しただろう。儀礼の法は伝統にしたがって定められたものであったが、数世紀もの間に複写された文書からは原典からの逸脱があったことがわかる。そのような逸脱は、占いを通じて神々に正しい行為であるかどうかを問いかけなければなかったのである。同様に、ヘブライ語聖書においても宗教上の正しい行為を決定する権威は YHWH にあるということがわかる。例えば、民数記15章35節では、モーセは YHWH に問いかけ、答えを得ている。いずれの文化においても、法からの逸脱は神によって罰せられることであり、死刑に処されることもありえる。

ヒッタイトの宗教において最高権威であった王は、適切な信仰を確実に行わせるために祭儀を執行する権限を祭司たちに委任した。同時に王は、失敗についての占いを指示する者であり、かつ宗教改革を行う者でもあった。しかし、どのような場合においても神々こそが、儀礼の法を書きとらせ、また行為の失敗を見出して怒り、最後には償いを受け取る存在であったのである。

注

- 1 Grimes, Ronald I., “Infelicitous Performances and Ritual Criticism,” *Semeia* 43 (1988) 103–122.
- 2 “Instruction to Temple Personnel” (CTH 264). Ada Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood* (Texte der Hethiter 26; Winter, 2006) を参照されたい。
- 3 Gary Beckman, “Bilingual Edict of Hattusili I,” *COS* 2: 81. Amir Gilan, *Formen und Inhalte althethitischer historischer Literatur* (Texte der Hethiter 27; Winter, 2015) 80–81 も参照されたい。
- 4 *išhiul*-と呼ばれる訓戒文書については Ada Taggar-Cohen, “Biblical Covenant and Hittite *išhiul* reexamined,” *Vetus Testamentum* 61 (2011) 461–488 を参照されたい。また、Jared L. Miller, *Royal Hittite Instructions and Related Administrative Texts* (Writings from the Ancient World 31; Atlanta: SBL Press, 2013) 1–9 も参照されたい。
- 5 ヒッタイトの宗教信仰の概要については、Billie Jean Collins, *The Hittites and their World* (SBL and

- Brill, 2008) および Trevor Bryce, *Life and Society in the Hittite World* (Oxford: Oxford University Press, 2004) 134-162, 187-210を参照されたい。
- 6 Ute Hüsken, “Ritual Dynamics and Ritual Failure,” in *When Rituals go Wrong: Mistakes, Failure and the Dynamics of Ritual* (Ed. Ute Hüsken; Leiden: Brill, 2007) 337-366.
- 7 「逸脱の創造力 (“creative power of deviations”)」とは、Hüskenによると「儀礼行為の逸脱は […] しばしば儀礼のシステムを回復させ、それによって儀礼に変動をもたらす」ことである (ibid., p. 346f.)。
- 8 ヒッタイト文書の概要については Theo P. J. van den Hout, “The Written Legacy of the Hittites,” in *Insights into Hittite History and Archaeology* (Eds. H. Genz and D. P. Mielke; Colloquia Antiqua 2; Leuven-Paris-Walpole: Peeters, 2011) 47-84を参照されたい。
- 9 Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, p. 18-20による翻訳。
- 10 ibid., p. 244.
- 11 この文書の最新の編集については、Gary Beckman, “Bathing the Goddess,” in *Marbeh Hokmah. Studies in the Bible and the Ancient Near East in Loving Memory of Victor Avigdor Hurowitz* (Eds. S. Yona, E. L. Greenstein, M. I. Gruber, P. Machinist, S. M. Paul; Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2015) 43-63を参照されたい。
- 12 Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, p. 58, 79の翻字と翻訳。
- 13 翻訳については、Gary Beckman, “Plague Prayers of Muršili II,” *Context of Scripture* 1 (Ed. W. W. Hallo; Brill, 1997) 156-157を参照されたい。また、「しかりのちにあなたは来た」というムルシリ2世の言葉は、上に引用した『神殿で働く人々への訓戒』(CTH 264 §7)の「神々が動けば、その意思は強い。捕らえるのは速くないが、一度捕らえられると二度と逃げられない。」という文言と比較された。
- 14 この文書については Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, p. 286-290を参照されたい。
- 15 KUB 5.7は近年多くの研究者に扱われている。以下は筆者による翻訳である。
- 16 Hüsken, p. 344f.
- 17 Itamar Singer, *Hittite Prayers* (WAW 11; Atlanta: SBL Press, 2002) 83と比較されたい。
- 18 Jared Miller, *Studies in the Origins, Development and Interpretation of the Kizzuwatna Rituals* (StBoT 46; Wiesbaden: Harrassowitz, 2004) 312-319と比較されたい。
- 19 Niccolo Galmarini, “Remarks on the Formation of the AN.TAḪ.ŠUM- festival: The Cases of CTH 615, 616 and 618,” *AoF* 40 (2013) 2337-349を参照されたい。
- 20 Translation of Richard Beal, “Gleaning from Hittite Oracle Questions on Religion, Society, Psychology and Decision Making,” in *Silva Anatolica: Anatolian Studies Presented to Maciej Popko on the Occasion of his 65th Birthday* (Ed. Piotr Taracha; Warszawa: Agade, 2002) 22ff. による翻訳。別の問いかけ (KUB 5.6 ii 5'-6') ではどのような手順が踏まれたのかが次のように示される。[... Š]A É.DINGIR-LIM A-NA DINGIR-LIM šī-īp-pa-an-du-wa-an-zi [IŠ-TU^{LU} MUSEN.]DÜ^{LÚ} AZU^{MUNUS} ŠU.GI-ia ŠIxŠÁ-at ” [鳥] 占い師と占い師、「老女」[によって]、神の神殿 [で...] 捧げものをするよう決定された。
- 21 王妃ブドゥハバは王家の書記たちにヒスワ (*hisuwa*) 祭に関するすべての書板を収集するように命じた。
- 22 Hüsken, Ibid, p. 352. 先述のヒッタイトの例、疫病に関するムルシリ2世の祈りでは、その原因としてはシュピルリウマが小トゥドゥハリヤを殺害したこと以外に二つの罪が見出された。一つは、かつての王たちがマラ (Mala) の祭を祝わなかったことであり、もう一つは彼の父親がハッティの嵐の神

の名の下に立てた誓いに違反したことであった。この点については、Theo van den Hout, “Two Old Tablets’: Thinking, Recording, and Writing History in the Hittite Society,” in *Thinking, Recording, and Writing History in the Ancient World* (Ed. Kurt A. Raaflaub; Eiley Blackwell, 2014) 181–182を参照されたい。

23 Ibid, 105.

24 ここでは詳細に論じることができないが、ヒゼキヤとヨシヤ以外に、アハズも祭司の側から反対されることなく神殿での儀礼を大きく変革した。列王記下16章10–16節。

25 王妃アタルヤの殺害の話（列王記下11章）あるいは、モーセが雄牛の像を造ったことに対してイスラエル人たちの殺害を命じたこと（出エジプト記32章27–29節）も同様である。